

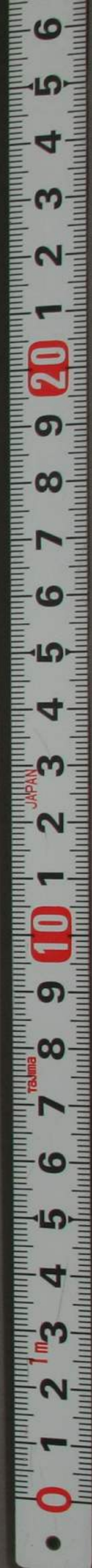


関ヶ原軍記

初編 壹

貳

2207
1



八遠 13
2207
卷 1-48

凡士農工商も其の職を家業として持用の器物を以て
今日と管の夏世界一般に然るに近世字本の巻中小部が白紙
何れ種々の書入又ハ紙を買束あるも本偶々賦見書
男女の陰癖を画き君臣父子の中や一面を未だ念事
同く多し是第ハ必竟一時の興小察しての戯言やん併
其職を以て道具ハ疵付のハ僻事なり著述拙筆者ハ後
何れも只言語と云々其遇ちと各免巻中の戯画樂書等ハ後
池田屋書院は是と歎然不復原一圓と承代りて諸君子所あるる爾
磨石山人識

和 漢
貸本所 東京牛込細工町 誠光堂 池田屋清吉

池清



園ヶ原大全并

夫園ヶ原の初と云ふるも近
江園佐和山の博多石田流約
少博三叔と云ふ力代流大名
藏亡の時と人皇百八代
後陽成院の御宇交長又
庚子年九月十八日あり
凡そ今よりいへる中より百

明治四十五年十月廿日
本校出版部氏贈

武指余年石田三叔が逆意の
根え込りり子とさづぬらよ
三叔の太閤の寵信をく
志美無事しりりりり
志ありとさづぬらよ
又奈りつりりりり
文車りの随一りりり
和漢も秀でりりりり

知る秀頼はさうさうんで
おのれ権勢と振り宿意
と事せんとは徳玉の大小名
戦りりりりりり
肉腐公は討奪
らんとは事さうらに
東照文を神妙なる御名
もりりりりりり

うひも忽ちあらず清利
とぬく百民を茶山の安
さうき^{あき}のあふぶく
志あるぐれは佳畧辛^{えん}等
運くるあり花も略^{えん}後^{えん}多
形り去れ心を^{えん}根え^{えん}て
しぬく大金と^{えん}き^{えん}する
のちり

天明元年六月

田丸常山迹之

清利

五

關ヶ原軍記初篇惣目錄

卷之壹

一 關ヶ原合戰發端之事

并五太老 五奉行 中老名前之事

一 太閤御不例淺野長政諫言之事

并太閤天下此度と前田

徳川ノ西家と頼之置給フ事

卷之貳

一 太閤殿下石田三成は御遺言乃

事

并片桐市正殿下は御請之事

一 太閤御他界之事

并殿下の他界は深く秘する事

卷之三

一 石田三成由緒之事

并三成秀吉公に仕へて大智は顯する事

一 石田三成神君は謀り奉る事

并太閤御葬式豊國大明神と崇める事

卷之四

一 石田三成前田

德川乃西公战謀まう事

并西公一度石田が奸計えいけいに陥入おとろ給たまふ事

一 德川家康公 前田利家不和ふひの事

并藤堂高虎朝鮮軍引揚ひきあの任え

战蒙せんむら事

卷之五

一 小西行长 藤堂高虎乃為知し仍なほ

狼狽ろうたいする事

并加藤清正朝鮮國しんの大勇たいゆう战顯けんする事

一 日本勢残ざんるに朝鮮國しんを引拂ひきふ

事

并大明勢たいめい日本勢战追駈おひる事

卷之六

一 小西ヶ同勢難戦危急之事

并加藤清正 小西勢救つて名

古屋は着陣之事

一 朝鮮大明も清正乃所業感

むら之事

并加藤清正 石田三成争論之事

卷之七

一 秀頼大阪入城之事

并 神君成瀬ヶ物見の様子

聞 大阪を立退給之事

一 大坂勢 家康公追奉

事

并井伊直政勇名顯事

卷之八

- 一家康公いんやまこう井伊直政いひのちか江御加増えごかぞへ之事こと
- 并な片桐且元かたぎりのみね計かひり依よく
- 家康公いんやまこう大阪西おさきにしの丸まる江御住居えごぢま之事こと
- 一石田三成いしだのさね謀略まうりやく諸大名しよだいめい連判れんぱん之事こと
- 并な家康公いんやまこう江十七ヶ條えしちつかいじょうの難題なんだい哉や
- 申上まへあがル事こと

卷之九

- 一家康公いんやまこう御難儀ごなんぎ之事こと
- 并な家康公いんやまこう中な之の嶋しま江引取給ひきとりたまへ
- 御軍ごぐん立た之の事こと
- 一大阪おさき勢せい中なノ嶋しま江追來おひル事こと
- 并な家康公いんやまこう御高運ごかうん伏見城ふし見じやう江
- 還御かへご之の事こと

卷之拾

一 伏見城ふしみのまちニ而

神君少かみのみこと一御心勞おんこころう之事

并石田方伏見いしだかたふしみの延日のちひ成なりル事

一 榊原康政交代さかきはらやすまさして上洛じやうらくの

事

并康政途中謀畧かみ之事

卷之拾壹

一 榊原康政謀略さかきはらやすまさ的當ちやうたう 御目見おんめみ之事

并伏見城盤石ふしみのまち十七ヶ條

仰おほせ分わからせの事

一 加藤清正かとうせいせい大阪おさかにい出でらしる事

并前田利家まえだりか病中びやうちゆう伏見ふしみのにい趣おもむく

事

卷之拾貳

一 利家

家康公に御對顔之事

并 家康公前田方に 入御利家

逝去之事

一 七人乃荒大名 石田代討んと

計し事

并 三成危急謀畧之事

卷之拾三

一 石田三成伏見乃城に駈込事

并 家康公石田三成を救ひ

給ふ事

一 石田治部少輔智略臆病と見せて

徳川家乃諸臣欺く事

并 家康公石田が智感と給ふ事

卷之拾四

一七將

德川家上軍使馳

事

并

神君御扱ひの事

一

石田三成諸將と會合之事

并三成上杉佐竹の意

従フ事

卷之拾五

一

嶋左近主人石田上謀略名論

述ル事

并三成再度諸將集むる事

一石田三成領國佐和山上下向

事

并結城秀康卿御送りの事

卷之拾六

一 福原

垣見

熊谷等改易の

事

并

家康公伏見御入城之事

一 大阪城

中闇討沙汰之事

并

家康公大坂御登城之

事

卷之拾七

一 神君

石田三成の屋敷

召上給之事

并倭人共加州家越謀之事

一 神君大阪西之丸江

御移住之事

并加州家城普請之事

卷之拾八

一 加賀陣御沙汰之事

并丹羽長重自國ニ下ツテ加州戦

窺フ事

一 横山山城守智勇申聞キ天暗乃

事

并徳川家加筋と御和睦之事

卷之拾九

一本多忠勝佐和山に檢使之事

并忠勝石田三成が謀畧

陥入事

一 上杉景勝逆心風聞之事

并景勝兼繼主從畧傳之事

卷之貳拾

一直江山城守香指原ニ新城あらた城しろ

築まかく事

并浪人車丹羽父子 山上道かみかみ及およ事

一藤田能登守諫状残のこして白昼あき

會津あいつと立退たちのり事

并上杉かみすぎの逆謀さか注進ちゆうしん領あきりの事

卷之廿七

一直江兼継返書千切ちぎレ之事

并神君 上杉追討御評定ごひやうぢやうぢやう之

事

一井伊直政大言加藤嘉明と口論

之事

并藤堂高虎忠言ちゆうごん武濱ぶらん事

卷之廿貳

一 家康公いへやま内供うちまがの諸將しよしやう高姓名たかぢやうぢい之事

并 家康公内謀畧いへやま加藤清正かとうけいせい事

高井揆校たかいけいこう以借受かりうけ給事

一 家康公加藤清正かとうけいせい称誉せうよ事

給事

并 清正けいせい悦喜えき御謀畧ごまがわ的當てきとう之事

卷之廿三

一 内府公うちうら伏見ふしの御留守居ごろうしゑ以鳥居とりゑ事

仰付おほせ元忠もとただ忠言ちゆうげん之事

并 内府公御進發うちうら石部いしべ御旅館ごりんかん之支

一 嶋しま左近さこん神君かみきみ以追奉おひまか事

并 左近さこん歎息なげき事

神君かみきみ乃御明智ごみち以感かん奉事

卷之廿四

一内府公北國御下向御道中之事

并源君御深急之事

一石田三成加賀井弥八郎謀

事

并弥八郎

德川家上使

事

卷之廿五

一加賀井弥八郎池鯉鮒喧嘩之事

并弥八郎水野和泉守討

其身堀尾討事

一石田三成大谷刑部少輔招

事

并石田大谷合體之事

卷之廿六

一 石田 大谷軍談之事

并三成乃家來嶋左近次初吉隆

小目見(の)事

一 毛利輝元 石田之荷膽之事

并廻文之仍而諸將大阪に馳登(る)事

卷之廿七

一 細川越中守忠真つねまの妻女むすめ義死ぎじ

之事

并上方勢伏見ふしの城しろに押寄おしよる事

一 若狭少將勝俊かつしげ臆病おそ病之事

并茶師上林竹庵たけいん義勇ぎゆうの

事

卷之廿八

一 鍋嶋直茂義之仍而鳥居が頼と

請合之事

并伏見城合戦之事

一 淳田勢敗軍之事

并小西勢鳥居が為る敗軍の
事

卷之廿九

一 石田三成軍使遣て伏見乃

寄手と勵り候事

并城兵深尾清十郎返り忠之事

一 伏見城再度戦争之事

并判直之猛勇松平主殿之助

討取事

卷之三拾

一 鳥居元忠勇戰之事

并 樽直之 松平五左衛門討

取事

一 樽圍右衛門 鳥居 上林討取

事

并 伏見落城之事

初編

惣目錄序

油漬

関ヶ原軍記初篇巻の壹

目録

一 関ヶ原合戦發端の事

并五大老入奉行 中老名前の事

一 大関氏不例法野長政練言の事

并大関天下の度と前田

徳川家と頼と龜の事

油漬

関ヶ原軍記初編卷之三

関ヶ原合戦後編の事

并五大老 大老 中老

名前の事

元々此書は治部乃二ツの治部
部を忘るる治部乃二ツの治部
を忘るる軍法なり夫古今性

来城見る平相正清等々
 安藤吉房より立所して天下
 城振り 安徳天皇とき
 ちさみく 朝も福来く福
 倉庫の勝ときづいなく武徳
 了下平元備ましく 一生
 一生涯のうちに無清佐頼朝起
 了く平家と亡る次頼朝も

平朝の君として城が小嶋よ
 おろり石橋山に教ひてより
 終り天下と平均して初めて
 去家北棟梁城よりとりて
 年入十三女にして死去あり
 その終りづらに四十二年を
 又小条平権をうかりん北條
 もまの九代にして相模守も

時入乃宗艦新田友中將義貞
のよあふ臧之義貞討死の
昭後天下も是利も成平一版
して指三代お徳も新目も後
是利の將軍家も二好がよあふ
終り臧之も終り平織田信長
公尾張り發つて武威四海
よあふれやよよ一は唯智

がよあふれよあふれよあふれ
よあふ太閤秀吉公も早族りり
あふも弓矢も取り亡る
信長の仇を報し終り河津も
常中も振り斬り斬りも
手と入も一生涯大うせの
吹かごうくに武威もつりく
臧後り斬りして石田治部中將

三成徳略活く平之平忠
秋おりの始見之志生橙野
りりて橋秋なるものころ
より起りて天下大平ひし
起り秀吉元来良将より
といく者も猶曾れ大將と
文女もくるるに政をれあ
ゆん職後の乱と書来せり
良

徳川家康公も是時
出給ひ三遠女を平均
く向ひて徳女に辛骨百余
戦して下治ありに治方
華城唱へ百年以来たごぬ
仲と成らるれに平
東照文乃所武徳も保く之
くあつ河ん人く毎月十

七日を精進して年一交代
所を礼する教をさるる之
但し日本必中神社佛閣乃
式礼を武家礼法令なりこれ
こそ関ヶ原所陣取後お定り
まをるゝこの関ヶ原合戦大岡の
あつちやうりさめばして大坂
の下細沢おさるる人多く又

石田三成所敵あれをとりく
逆賊の名をさるるは其を
廣大にして謀畧深くこれ
これと定めして下の系は
のどくくもこれ東物南水
りうのく容易なり一統仕懸
あ也流々とも多くの山若戦
所一代の所幸骨の謀略を

一、
東の山部とくりして東西とうせい混ま乱らん
さうとさうと一統いつとうしるる
根元ねもとあればこそとて人
力ちからはあふさうさうと
さうに
東宮とうきゅうの御み太たい切きありそむく
大内おほうち乃の時ときも大おほ老らう職しやく人ひとあり
不ふ得とくたれ也なり

岡八州おかはちしゅう併ひ勢せい四し日にち市し江え別べつ
弟あに津つ遠えん州しゅう濱はま松まつ三さん石いし園えん傍ばう
後ご別べつ真ま津つ

内うち大臣だいじん德とく川がわ家け康かう公こう

加か賀が能の登のう越えつ才さい

大おほ納のう言ごん前ぜん田でん利り家け

安あ芸ぎ固こ防ぼう備び後ご長ちやう門もん

中ちゆう納のう言ごん牟む利り輝き元げん

備び前ぜん美み作さく

中ちゆう納のう言ごん淳じゆん田でん秀しゆ家け

奥州會津

中納言上杉景勝

又在別の面々の左ののごとく

江州佐和山

石田治部少輔三成

和州

増田右衛門尉長盛

上州

長束大藏大輔正家

上野

浅野彈正太弼長政

播磨

大谷刑部少輔吉隆

中老の面々の左ののごとく

スレ府

中村式部少輔一氏

淡波

生駒雅楽頭一政

安國寺長老

諸司代職

丹羽菴山

前田德善院玄以

曰 慶長二年八月十八日
太閤殿下由地界時より四年

六十四歳ありしに在^お世^せの時
雷^{かみなり}も^も鳴^なり^し大^{おほ}く^く浪^{なみ}
も^も鳴^なり^し大海^{おほうみ}も^も平^{ひら}
香^かも^もの^のり^りと^とひ^ひる^るが
無^む常^{じょう}に^に教^{きょう}を^をの^のり^りせ^せぐ^ぐよ
手^てぶ^ぶて^てあ^あく^く天^{てん}下^かに^に政^{せい}更^め
る^るの^の道^{みち}を^をと^とり^りて
内^{うち}府^ふ家^け康^{かう}公^{こう}又^{また}秀^{しゅう}頼^{らい}の^の後^ご

見よる前田利家以抱きし
所相東市正武徳も石田三成
もお定む形て太閤地界
の事と深く秘する事
其後手取形して騒動斜
あまづあつて一乃以違ふ
よる形解在陣の軍令
門ふべき事との評定通く

あり石田三成倭奸と評て
家康公と利家との中を
さう一及堂なる虎形解
海へして軍令其の揚
その所加及清正別當と形
りきよあまづく其西人
と養う日本人とく
く引拂ひたり

太閤不例 淺野右政 練玄の事
兼太閤天下は隻と前田
徳川の毒家之輕と對ありし事

初く太閤秀吉公は尚六月涉
病重なりて惣所つらん不
食しぬひしがつ下は医術
者 瑞寺 徳山の祈禱ん

ひしとらび全快しぬひあり
其業病ぬらう又七月に入
り病氣再發しうつてはらびの
御命たりとらうりらあう
おのひとらひ天下は徳大老と
孫は心依見の殿中へあて
このうらびは我病氣の祈禱快
き是来るしそれより身を

幼年此秀頼がさるるれのみ
隆徳の障りあり南年湖
六丈千載々天下結ぶおと
くくめん 別しんちうく
下安赤の儀をさるるべし連
徳野の牛王千血判を承て
誓紙をさるるあひ秀頼
此守りぶくろく細め志んせ

らんその後下下の徳大名
泉庵公利家へも形見の品
繪替りお急成黄金それま
千徳めさるる墨玉ひくそ
も頼由書生医術新福ん
そさるるり新く七月も
八月お入るる病体い
らるるん千らうて

清野長政 石田三成の妻人
此病床はゆりてはお清くおま
をれりるの刻ち八月六日あり
叔父園室ひらりの部表年より
幸當るも危も篤族より出て
百陣と破り無及と云ふ
百戦の功を金も所時も治
ありさるる日中と部のごとく

去年よりして園白藤と云ふ
短昂を 新永代御政事
戦乱し清めて威光を是
をい解りてありと
のそりてあり是必一軍馬
向けし存今之部の際あり
のぞんで降参の降あり
秋免せむて下り必し秀頼の

物事ありあつて関東の肉屋社
奪ひしりすめんも必定あるの
事ゆへに又さやとるねあ
その時石田三成の北谷へ小寇角
清滅後そそ遊こ 徳川家
の威光さるるべしこの時石
殿中へめられく討果さるべし
とぞやりの時より後野長政を

これとすあつて大さふれと河交
徳川家 徳川殿
今討果し終の時さるる
とぞや 冥途小玉なりあり
又徳代忠頼の家人お関八州よ
ちりまんとそ武勇烈しく
以後中々意をべりて徳川
と下れ乱と成るるまあり又

竹さぬも

武徳あつく

美金利乃ごとくあるればお手に

とつては六ヶ殿大将あり今

更ま家康いえやすありあぶりの

るゆり心こころ兎角うしかい投掛なげかくは送お

言ふ天下あまの此後この足城あししろこのまゝ

百の条ひゃく以初年いその秀頼ひでより君城きみしろ也なり

徳川家とくがわ

家康いえやすの事こと

獲とて十八じゅうはち才さい子こ如ごとくせあ

ちで天下あまのと家康いえやす

領あがけくはくくちうちうちうちうの秀ひで

頼より君きみも御成長ごせいちょうま

御威光ごゐこうを増ま又徳大とくだい名なも

志こころくはくくちうちうちうちう

ら長政ちやうせい秀ひで才さい神妙かみまうあり秀吉ひでよし

ものつともありと名なく

去りしつとて八月八日

家康 利家乃のあつと振あひ
病山の康に記すれ夫より
秀吉乃の信せよ我武徳盛ん成
年よりせ命れりとも若く名
を以て報解出軍をたし海して
彼地より河を率りて志し此
さりりあり我免後とも秀頼復

恙年 してころあつりあるし

了下此結大名も又年休あぬ
トよさちうりまつて天下此夏

る大小と好く 徳川家

頼り中条秀頼十人集りて

お放しに返すもくまづそは

やがてい依見りあつてころあ

れ修しを返すもくまづその

ふ意地味有く
家康公も進んで西辭退乃西返
何れも報あひの何れも知
雅も何も何の子細りも又
年来回好の良お是有は
天下は後思も他東は西下知
及ん先其肉よの西不例も
及ん先其肉よの西不例も

全收千一ぬべく目新及西統
言しお成りやべく
清濁録あうり次子加賀大綱言
地りして秀吉も利家の子
と名あひ志るる
是れが我年来き通
の真信も志るる事百年此命
と名あひ志るる事百年此命

りて雄略の山百た款と見ても
是下と雖く雷神ともまねさ
下さんとも執りし有りうた
免乃さる斗りり階ぶが
今も我免をばし初年此
秀頼の身代しころりる
了下の政事り
徳川家はそのころり其後り

秀頼の身代後見代りし
み入の系成長の後天下
主将と成て秀吉が武名代
法せしれり
たのみ存る也次る朝鮮
一渡海せし軍会たのし
我免をばし初年此
そのし七ヶ年り平均せざん

ばこの後をさしきりて軍勢
を引取り天下安泰にして
徳川前回の毒家不和あり
て争ひて評定権者にこのむ
ありとあふふと揺りて宣
へむ利家も涙を浮かせ身不
肖ありといひて吾武骨と以て
天下に知られ太閤の由意哉

以て武徳所子余り
徳川家と心と合せり天下
茶山の安身おの秀頼と此
世後見の依義知社とる所
ありて後継者されり

池清

関ヶ原軍記初篇卷の一段

池清

油清

関ヶ原軍記初篇卷之貳

目録

- 一 太閤殿下石田三成（御遺言の事）
- 并 行柄市正殿下石田清の事
- 一 太閤由地界の事
- 并 殿下此由地界と深く秘する
- 事

油清

関ヶ原軍記初篇卷之貳

太閤殿下 石田三成へ内送之旨

の事

并序桐市正殿下へ内清の事

去程より太閤殿下内不測産ありし事

五大老の内一二の

徳川 宗田共直家正内送之旨有

のち又石田三成を殺し
は時石田三成の嫡子三十七歳
あんなども石田の嫡子あり
み寺社の随一きり依和山武
十百石を以て又拾万石
此代友西とあづかりその人
令銀紋室に支配せしめし
倭奸の心を放て下は徳大忠

此後して元暦は好ま奢ると
皇女又忠節を深き者之は石田
を殺しく奪く作をけるる
秋元後よる下りあり
京康の物もぬるべし
りして汝ら謀略をせし
初年此秀頼をりり
お構へく一せん此利と思ふ

愈々々々唯秀頼をたのむ之
と云頃千のうへへむ三成を
派をるがし 降んで畏れあり
有りし私欲をえ来早族の者
ありといへば 有清厚恩に依て
大録改訂りみ有りの中
千々々々々々々々々々々々
御殿後より三枚片時も安座

仕々々々々々々々々々々々
中々々々々々々々々々々々
由一統の御代と成りて
有清前を主としてこの時
石田がん屋より秀頼の母と
ありて必々々々々々々々々々
天下と平均せんや思ひ有り
ありとも忠節守らん此

とあり申分大徳畧たりして
忠厚しき石田あり叔子の次
より古宮内目利やありけん
行相市正次ありて深く清
このまあり在る子のせり
秀頼ともいふなりたむひは
病康乃の徳乃のよく長くは
且えりやせりらの秋穢後

とあり此さりり是るの子なり
あり夫婦の心度も弱りけり
唯思ふとありいよふ六歳を
是なるをいふとも甲斐なき
事あり秋元後天下れり
徳川家はこのみき
とれり別条あり秀頼が後
見えり前田利家と頼とあり

後多秀頼が抱きしる所相を
言はたのむあり我免せを天
下は結候とめんく結あり
あゝんを乞ふらつてい
徳川家と志ささぐ天
下の中混るとして終る
云哉とあゝぶ屋もありと
中よても汝らの秀頼とて護

して後よの天下一の功
斗るべしと太閤の志の候
をくも所相と物候り
しめを市正法く
是と受けしぬり以答へ
るの由を易く思ふ
私しる志津ヶ嶽の御
よりとんくゆえとの

師原恩を山のてらくまきく
秀頼の成長なる迄を護たり
うくともなぐりぬる新し
も実早又十才にお成中山又
徳川及て謀略智骨兼徳の大
將也も此市正千の九才の年
是より少くも終るのそ初も
も又まきくいのちくく

万華此御代也
只君は此界に神靈也
と申すく師子孫を保護
玉の原こそ秀頼といふ
系々世に次一門ありそく
子の日後も此家知る所
引さるこそ秀頼の所
也一也

大園は地界の事
并殿下は地界と深く秘する

叔大園殿下は病体退ひく
守せぬ事ありしは
秀吉公は天地の帝有此人
よして洛陽のお軍塚大なる

唱初まら事凡そ事日むり
ありこの事一足すて
一ゆ急秀吉公もさすて
命のちがまりし事
由遠云あり日本は銘大なる
もう子く神文と志すむ
く今さす忘るべし
あは九列名護屋へ

朝鮮後海の軍会越前を
 ありやう天下れり大由と
 徳川家の下知越
 文又さありそそれなり
 一と清隆終の内用意年て
 徳大名近長も西對めん
 あり清隆終の内用意年て
 前田玄以 長束正家 申む
 一氏本陽機徳をうらむ日と水
 容孫重りけり新高長
 三年八月十八日卯時刻
 いり秀吉公の病重なり
 終心胆乱し
 ありて今 冥祐も免後
 甲寅と扱く入色納むべ
 ことのりありそそれなり

太閤大書より六拾四年一評平
妙をとくくとの西一ごんあり
これ一生此肉きつねの味もるが
ごらくくして終るありあり
るとのりるあり叔十八日未
の刻西地界ありこの時考釈
今この西造物と西像より
中するの十二三文此書子の某州

是が了りて終ると負りあり
の軍馬大明神の姿を
白大長のもが了り八葉紙
くらぬりありて葉震殿に
糸肉の姿と書く考釈は
威長の後ろの本を紙にす
るくくして作られあり初て
又それをも信お評定し

大岡の由地界とばりて隠り

石田云成泰徳と成りて之
ともその所ありて者侍の
人平河江利石田村
の産りて其徳より
起り大岡秀吉公の親長
として徳文也り秀吉

より其てり大岡の地界を
深く隠りて其徳より
りて
小利家へ通りて秀
吉公の遺骸と阿弥院が尊
子葬送して其長大明
神と号し其後下代
後見りて
家康公の人

都てのちと 以下知之
うつて 朝鮮 西海海の軍
兵引えべまらんと 侍苦勞
ぬされたりこの世の何
かひ石田三郎 泰徳と
して大洲を 利家と
家康公の 直統と
不わらうと む依て

家康公を 度堂と 虎次
長く 朝鮮の 門取と
石田三郎 泰徳と 下向
く 裁判あり 朝鮮 西海
海を 軍名とのち
あり

ども跡々別盗あり去
ば石田之成も才智發明を
并ぶりの奇 卷も逆賊
とる軽も多額を見るも
其の中いそれあはれ
とありつとも秀頼一統
代とすやとありあは
る深切りしてより

いども我所もその権
をとり 家康公
かさげたてまつ
思ひしそあはれ一統一夕
此事よりあはれ太閤内在
世の時よりその
おのあはれ今急りこの
級と保るるも 智謀

計略^{けいりやく}をそのころ所と見
くくくくくくくくくくくく
あつ所ありけり此事いざあり
放^{はな}つ^つき^きる^るそのあり自分^{おのれ}
此^こ智^ち平^{へい}何^{なに}せ^せく物^{もの}の^のこ
孫^{まご}略^{りやく}を^を多^{おほ}くの^のむ^む時^{とき}を^を必^{かな}ず
を^を調^{てう}畧^{りやく}と^と事^{こと}ら^らその^{その}根^ねえ
地^ち実^{じつ}の^のゆ^ゆら^らく^くく^く

くくくくくくくくくくくく
石田^{いしだ}を^を所^{ところ}あり^{あり}に^に智^ちを^を思^{おも}ひ^ひ色^{いろ}
多^{おほ}くの^の事^{こと}を^を身^みに^に病^{やま}ひ^ひあり
大^{おほ}國^{くに}内^{うち}地^ち畧^{りやく}の時^{とき}を^をや^や師^し師^し
斗^{たう}略^{りやく}を^をめ^めり^りく^く
家^け康^{かう}公^{こう}と^と利^り家^けの^のあ^あの^のさ^さ
く^く隣^{りん}を^をと^とと^と不^ふ和^わく^く威^い
を^を紙^し一^{いつ}枚^{まい}も^も破^{やぶ}り^りく^くぬ^ぬる

る有り又極りそがと
ありくうつ時を大さの
そのの碑くあり或ひの
親が子年吳息とさるふ
あむりしとびくいつの
親父の持病おさうり
とて苦干せぬうあ
ぬる有り吳息とは一時よ

くまへつひのいあまらず
親がう
東恩文の清徳畧の平生
うろく年あんこの時
る清徳自述り清
大夫夫りその手代りて
全く持の利と有あり
石田と立居干徳略有り

これまづさくおのが女たす荒
腕あちでさるあ人あ手あ却えつて
個こ畧り手あ落あくつひ手
その身あとほろつ不あせり
其あも相あ子あが

東照宮あして石田ああん
どろ款あを板あ解あくさる
ゆゑ逆あ練あとらぬりきり

志あらんとも石田あの幸あ倅あ
のそのよあはるあを
秀あ女あしてそ所あ登あの
あれを大園あの目利あよりく
又奉行あの随あ一あとるあ元あ来あ
凡あ下あ此あのあ手あ所あに
時代あ不幸あして久あく
氏あ同あ手あ居あたりそあ友あ秀あて

日本此法乃のふくまて
終く御款とのあれども
又悪好とのを難し悔へ
年智恵のりちゆる愛
かすこすこして余のあり
聖人の語り法身實所
此大通とちんくも實や
をりのふりありさん

者の利ある人こそ
心發明とては振くは
さありと急ぎ石田の
手物者ともいふは
人の及む処あり

油清

冥ヶ原軍記初篇巻の二終

油清

